九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

馬内侍集における編纂意識の特徴についての一考察

福井，迪子

https://doi.org/10.15017/12206

出版情報：語文研究. 29, pp.57-72, 1970-11-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

馬内侍集における編纂意識の特徴についての一考察

福井迪子

「馬内侍集」は、いわゆる雑纂形態である。しかし、非組織的なその形態の中にも、部分的にもあれ、何らかの撰者の意志の投影がみられるのではないだろうか。こうした疑問について、これは一考察を試みたものである。

はじめに家集の性格、所収歌の詠作時期の考察をした上で、撰者馬内侍の家集編纂に対する態度・意識などについての考察を進めたい。

一

馬内侍集は、馬内侍が多岐にわたる宮仕え生活において、多くの権門貴公子たちと交した恋愛歌の贈答を主として、いくらかの、後宮及び齋院生活の雑詠から成っている。

家集収録歌二〇七首[注1]の中、私の調査では、馬内侍の詠作とみられるものは約七割弱の一三一首、そのうち恋歌が八三首、比率にして六三、三パーセントを占める。これを、因みに略〻同時代に生きた小野小町・清少納言・紫式部・赤染衛門・伊勢大輔・和泉式部のそれぞれの家集に於ける自詠歌総数に対する恋歌の百分比と比べてみよう。すなわち、竹内美千代氏の御研究[注2]によると、それぞれの百分比は、赤染衛門集が最も低くて一七、五パーセント、次いで紫式部集二三パーセント、伊勢大輔集二八パーセント、清少納言集四三パーセント、和泉式部集四四、五パーセント及び小野小町集五三パーセントとなっているが、これらの家集の中では、馬内侍集の百分比六三、五パーセントは最も高い位置を占めることになり、恋愛歌人としてその名の高い小町や和泉式部の家集が示す百分比をはるかに上まわっている点に注目される。これは、赤染衛門や和泉式部の如く長生きして、漸く盛んに催されるようになった歌合せの席に参上し、多くの歌を残したり、また隠棲後、釈教歌を多く残すなどのことのなかった故であるかもしれぬが、この家集の性格を端的に示すものでもあり、馬内侍その人が、特に権門貴公子たちとの、いわゆる恋愛至上に生きた、恋愛歌人と評されてきたゆえんでもあろう。

二

ここで、この家集中の歌が、馬内侍の生涯のうち、ほゞどの時点からどの時点に至る間のものかを知る必要があろう。しかし、詞書によって詠歌年次をあきらかにし得るものは極めて少ない。十九番「しはすふたつありし年」の詞書から、天元五年（九八二年）と判明するもの、また、男性の官職名から年代のわかるものなどを除いてはすべて明確にしがたく、詞書や歌の内容からその大略を推定するよりほかない。従って推定し誤りがあるかも知れぬが、できるだけ心して推定してみたのが、次に記すものである。しかし、推定可能な範囲は限られており、ここに記した僅かに二〇余首にすぎず、後の百八〇余首については、おそらく宮仕え中の詠作であろうということ以上には明らかでない。

なお左に記す詠歌年次の推定は、便宜上ほゞ年代順に並べたものである。

＊以下に引用の家集本文は、すべて契沖筆三手文庫蔵本によるものであり、歌番号は、同契沖筆本に通し番号を付したものである。

＊［の印は、贈答あるいは同時点に於て詠まれた歌であることを示す。

歌番	詞書ないし歌詞の一部	考えられる詠作年次
82	左大将兵衛佐にてをはせしときう つきに物をいひそめたまて	朝光兵衛佐在任期間 安和二年五月二十七日（969）～天禄元年十二月九日（970）の間
16	したのはかまのこしに結ひて謙徳 公のもとにつかはしける	謙徳公の薨去した天禄三年（973）十一月一日以前
124	五せちのところにしのひてあるに おほとの、少将にてをはせし時見 つけたまうて（略） ともたちのもとよりあまになりな むとありしはいかにといひたれは しかすがにかなしきものは	「おほとの」を中関白とすれば、少将であった天延二年十月（974）～貞元二年正月七日（977）の間 嫄子中宮逝去の頃と仮定すれば、嫄子逝去の天元二年（979）六月三日以後～七月頃[注イ] 天元五年（982）閏十二月
4	しはすふたつありし年（中略）うるふ 月はいかゝおもふといひたれは きり〳〵すのなきしをひとりこと に	『大齋院前の御集』所収歌 永観・寛和の間（983）～（986）頃
53	さい院よりうつえをたまへれは	『大齋院前の御集』所収歌 丁卯、永観二年一月十六日（984） 又は、己卯、永延元年一月十六日（987）
78		
77		
142	かめのかたをつくりてこにうす物 をはりて蛍をいとおほくこめたり さふらふ人〻によませさせたまひ し	『大齋院前の御集』所収歌 寛和元年[注ロ]を中心とする両三年の間（984）～（986）
80	左大将ちかことふみををこせ たまて（略） ちはやふるかもの社の神もきけ みそきの日しのひてかたらふ	齋院出仕時代 天元三年[注ハ]頃（980）～永延二年[注ニ]頃（987）までか
109	人〻のもとより うしろめた神もき、いれぬ さふらひし人のほかなるにふ みたまふとて	齋院出仕時代 右同 齋院出仕時代 右同

93 しめのうちにおなしいかきの
兵衛のすけなる人かたちふと
みな人きゝて後中将にふみか
よはしけれは人のきゝていひ
たる
かしは木は雨も人めもしけしとて
みかさの山にふみかよふとか

兵衛佐・中将の組合せを
○実方と中関白とすれば、天元元年十月（978）～永観元年十月二十日（983）の間
○道長と中関白とすれば、永観二年二月一日（984）～寛和二年七月十三日（986）の間
○道長と公任とすれば、永観二年二月一日（984）～寛和二年七月二十三日（986）の間

41 五月宮の御まへに雨のいみしくふるに（略）
正暦年間（990）～（994）頃

84 あせちの大納言むかしは物な
ときこえたるをのちはほかに
て人かたらふときゝて
さはにみなおりたちぬとも葉をわ
かみわかゝりそめしよとのあやめ
は

按察使大納言を
○為光とすれば、天元元（978）年十月十七日～天元五年（982）の間
○朝光とすれば、永延二年正月二十九日（988）～正暦四年正月（993）の間
○済時とすれば、正暦四年正月十三日（993）～長徳元年四月二十三日（995）の間

85 五月のなか雨にあやめのおちたる
を宮御覧して
右同

97 正月に空のけしきなともよしよめ
と宮の仰られしかは
右同

143 十月はかりおもへることよみてと
宮よりおほせられしかは
右同

63 これをきゝてあきのふの朝臣
さ月山みやまかくれの草木とや
高階明順とみて、定子立后に際して正暦元年十月五日皇后宮権大進となった時から、同四年正月二十八日但馬守に任ぜられ、下るまでの間。

1 清涼殿の御つほねにうへわたらせ
たまひて（略）
1・2は同年。中宮（注ホ）を定子とすれば、定子入内の正暦元年（990）正月―五年（994）頃の間。（中関白

2 おなしとしの三月に中宮の御かた
に花をかめにさせたまひて（略）家全盛の頃）

189 あるところの御まへにきくあはせ
給ふとてあるもの、月あかきにこ
ひありくをみて
人かたらふとき、たまひて中関白
正暦末年頃（注ヘ）

103 人かたらふとき、たまひて中関白
103・111共に中関白とあるので、道隆が関白時代とみて、正暦四年（993）四月二十二日～その死、長徳元年四月三日（995）に至る間。

111 中関白殿をはせむとのたまてまへ
わたりたち花のかきりおらせてす
き給ぬれは
右大殿は道兼と思われる。従って右大臣在任期間のこととすれば、正暦五年八月二十八日（994）～長徳元年四月二十七日（995）の間か。

122 右大殿ものしたまてのころ（略）

140 あはたの右大殿夜ふかくかへらせ
たまひて（略）

155

かたらふ人おほかるおとこの
とをき所なりけるかのほると
きくかまたみ日ありとき、て
こよひ君いかなるさとの月をみて
都にたれを思ひいつらん

かへし

宿ことにねぬ夜の月はなかんれと
ともに見しよの影はせさりき

155は『如意宝集』所収歌。玄々集[注ト]では、但馬にいる明順に贈ったことになっている。そうとすれば正暦四年(993)正月二十八日但馬守に任ぜられた以後

156

207

てん上にてなき名をいひたて
けれは
もえこかれおきのやけの、くゆる
うへに見えぬなきなをおほすなる
かな

返歌156は、『道信集[注チ]』に近似した歌がある。もし道信とすれば、永祚元年三月(989)以後正暦二年(991)頃までの間。

『如意宝集』所収歌

『如意宝集[注リ]』成立の長徳二年(996)以前

〔注〕

イ、本文三章　67頁参照。

ロ、荻谷朴氏の説による(「平安朝歌合大成」三ノ六二五頁)

ハ、天元二年六月婉子の死後、朝光を介してその血縁関係の選子のもとに移ったとみられる。

ニ、「大齋院前の御集」の中で、最も新しい年次を示す「実方の少将」の在任期間、及び御集をまとめた期間など考慮して推定した。しかし、正暦元年定子入内頃まで齋院に仕えた可能性もある。

ホ、もし中宮を婉子とすれば、天延元年(973)～天元二年(979)頃となる。

ヘ、「平安朝歌合大成」三ノ六七五頁による。

ト、「あきのぶ但馬にありけるに月をみていひやる」との詞書で入っている。

チ、「道信朝臣集」(桂宮叢書(一)八八頁)に、「ある女に」の詞書で「やどごとにありあけの月はながめしに君とみし夜のかげはせざりき」とある。道信は、「大日本史」国郡司表によると永祿元年三月但馬権守に任ぜられており、また大鏡裏書に正暦二年美濃権守となったことがみえるので、馬内侍の歌154への返歌とみれば、その間の詠作ということになろう。しかし、馬内侍集155と近似してはいるもの、二・三句に微妙なちがいがあり、特に当時は古歌や他人の詠作の一句を変えて贈答に用いたりする例もまゝみられるので、これもそうした類かも知れず、道信と特に親交のあった公任・実方《道信の友交関係については安藤太郎氏の「藤原道信の生涯について」(「言語と文芸」昭和三六年一一月)に詳しい御研究がある》、また相如らが共に馬内侍と親交を持っている点からすれば、おそらく道信とも友交関係があっただろうと推られるのではあるが、道信と内侍の交際を証明しうる資料も他には無いので、155の歌を道信の詠とする確証はない。こうした問題を孕むのだが「如意宝集」には「たじまなる男に」云々とあり、道信が但馬権守をつとめ、次いで明順が但馬守に任ぜられているところなどから、一応あげておいた。以上のように人物関係に矛盾があるが、154155の贈答時期は、道信・明順の両者が但馬に関係のあった、永祚以後正暦年間のものと、略ゝ推測できるのではなかろうか。

リ、久曽神昇氏の「如意宝集は、長徳二年四月乃至長徳三年七月の間に

なったもの」であろうとされる考証（「平安稀覯撰集」解説篇五六頁
―古典文庫）による。

しかし、幸いに所収歌の中、詠作時期が最も早いことを暗示する歌の詠作年次の推定が可能である。すなわち最も早いものは、左大将[注3]（朝光）が右兵衛佐であった卯月――公卿補任によると、安和二年閏五月に右兵衛佐に任ぜられているので、「卯月」は、翌天禄元年（970）四月とみられる――か、十六番歌の謙徳公との交際が最も早い頃のものかと思われる。謙徳公との交際については――公は天禄三年（972）十一月一日、四九才で薨じたので、それ以前、仮りにその交際が朝光との交際以前のこととすれば、或は公が右近大将・左近大将をつとめた安和二年（969）頃か、その翌年天禄元年のはじめ右大臣に任ぜられた頃か。謙徳公四六、七才、内侍一八、九才頃のこと、推定することもできようかと思う。参考までに記すならば、拾遺集五五三・五五四番に、実資が童であった頃（安和二年（969）二月二二日、一三才で元服する前以）馬内侍の家に碁をうちに行き草紙をかけものとしたが、その時に交した内侍と清慎公との贈答があり、齋宮女御集には、村上帝崩御（967）の後、里に下っておられた女御をお慰めした贈答歌があるが、それらは一首も家集には収められていないのである。つまり家集には、徽子のもとに出仕した時代（鈴木氏によれば、おそらく規子の御相手役として幼時から出仕[注4]）のものは一首も収録せず、こゝに一応の区切りがおかれたようで、家集はそれ以後の宮仕えにおける恋愛生活を主とした歌の記録となっている。こうした意味からも天禄元年頃を家集収録歌の最も早い時点と見ることに妥当性があろうかと思う。また所収歌のうち、詠作時期の最も遅いものは「おとろへはてゝうち院にすむに」の詞書をもつ二〇六番がそれであろう。おそらく定子中宮崩御の後、何時の頃かはわからぬが、漸く老年に達したその身を宇治院におき、隠棲生活に入ったことを暗示するものである。家集中には、この歌より以上に老年に達してからの詠作とみられる歌もなく、隠棲生活にふさわしいと思われる釈教歌もない。宮廷を退いた彼女の老後を物語るものは、ただこの一首のみに帰せられている。華やかな宮廷女性としての恋の思い出の数々を記し来った今、おそらくは余りにも華やかだった人生の末に、宇治院に身を托す老いしれた日の歌を数多く記しとどめるには忍び得なかったのかも知れぬ。

なお、この歌は、家集末尾から二番目に位置し、後拾遺集にも入っているので、あるいは勅撰集からの補入ではないかと見られるふしもないではないが、後拾遺集春上、七〇番「とゞまらぬ心ぞ見えむ帰る雁花のさかりを人にかたるな」の詞書に「帰雁をよめる」とあり、馬内侍集二〇六番の詞書には「おとろへはてゝうち院にすむにかへる雁をきゝて」とあるのとくらべれば、詞書の在り方からしても、家集のものを簡略にして勅撰集に入れたとは考えやすいが、その逆は到底考えられない。詠歌年次は明らかでないが、「おとろへはてゝ」の詞書から、およそ六〇才を越す頃ででもあったろうかと思われる。

以上不十分ながら、家集の性格と所収歌中最も早い詠作年次を示すと思われるもの及び最も遅い詠作年次を示すと思われる

歌によって、その年代のあらましを考察してみた。

三

以下、章を改めて、馬内侍の編纂意識ともいうべきもの、断片的ながら表れた特徴について、具体的に見てゆくことにしたい。

一般に私家集の編纂形態には、整理されたものとしては編年体のもの及び類纂形態のものがあり、歌集に或るまとまりを付与しようとする編者の意志投影がそこに見られるものと、それに属さない雑纂形態のものとに二分することができる。馬内侍集は、いわゆる雑纂形態に属する自撰集とみられている。しかし、雑多な歌を、撰者としての何の意志投影もなく排列したものであろうか。あるいは、部分的にもせよ何らかの連想に連なる発展や類聚意識による排列など、或る種の編纂上の意識が働いて排列されたと見られるところはないであろうか。本位田氏が「馬内侍集覚書」[注5]の中で、

原形はほぼ年代を追いながら、それぞれの相手を中心にまとめられていたのではなかろうかと想像されるが、脱落、錯簡が多く、さらに後人の補入や竄入が加わって、今日見るような混乱した姿になったのであろう。

と記される程に混乱を招いた姿が現在の形態なのであろうか。たしかに脱落・錯簡とおぼしき所があり、それについての考慮は必要である。しかし、氏の述べられる意識の他にもいくつかの編纂上の意識が重なり、働いた結果、このような非組織的な形態を呈するに至ったとみられる部分はないであろうか。こうした意味から、少〻角度を変えて見てゆきたいと思う。

まず、年代順排列に対する意識について――、前節で詠歌年代を推定してみた表を見てもわかるように、所収歌の中詠作時期のもっとも早いものは、左大将が兵衛佐であった頃、もしくは謙徳公に袴を奉った頃の歌とみられ、それは天禄元年（970）頃であった。然るに巻頭歌を見ると、

(1)　清涼殿の御つほねにうへわたらせたまひて梅のはなのすくなくさきたるをけちめもみえしかしすくなけれはとおほせられしかは

さかりありてちらましいかにおしまゝしこゝろのとけき春のはなかな

(2)　おなしとしの三月に中宮の御かたに花をかめにさゝせたまひてこれかちる心よめとおほせられしかは

ちらしとやたのめそめけんはかなくもとまらぬ花にそふ心かな

とあって、「上」が円融帝をさすのか、一条帝をさすのか明らかでないが、中宮（(2)の詞書）を時代的に早い皇子と見て考えれば、天延元年（973）～天元二年（979）の間となり、八二番・一六番の詠作年代よりも巻頭歌の方が後になる。年代順排列の意識が一貫しているものならば、当然一六番ないしは八二番の歌が巻頭にきて然るべきはずである。こうして年代順排列の公式は先ず破られている。最も敬愛する帝と中宮の御前において、歌を奉った栄ある日の思い出が、年代順排列を排して、まず巻頭を飾らしめたのであろう。また一四二・一四三の排列をみると、一四二番の蛍合せの歌は「大齋院前の御集」との重複歌であるが、萩谷朴氏[注6]によれば安和元年を中心とする両三年の間（984

—986）に催された時のものと目されている。そして次に配されている一四三番の歌は、その詞書に「十月はかりおもへることよみてと宮よりおほせられしかは」とあって、例によって「宮」を皇子とみるか、定子とみるかの問題を含むが、皇子とすれば973—979年の間、定子とすれば正暦年間（990—995）のこととなり、相並ぶ二首の間には年代順排列の意識があったとは受けとれない。また巻末に置かれて然るべきはずの、家集所収歌のうち最も遅い詠作であることを暗示する二〇六番の歌は、末尾から二首目に位置し、末尾は年代的に早い詠作とみられる殿上生活時のものである。こうした傾向はそこ〻にみられ、お〻よそ後の方に老境に近く詠じた歌が収録されてはいるらしいものの、年代順排列の意識は、編者馬内侍の脳裡に必ずしも一貫したものではなかったと言うことができよう。

次に人物を中心としたまとまりについて調べてみよう。左に示すのは、特定人物とのか〻わりを示す歌の番号である。大和物語におけると同様に、最初は固有名詞を用いて人物が示されても、次からは三人称表現がとられているので、果たして一連なのか否か疑わしいところもあるが、前後の関係から一続きになっているものは、一応一群と考えた。

宮	2・41・85・97・143
左大将	6～8・11～13・17 18・24～33・80～82
公任	105 106・（54～61）
中関白	103・111・124 125
実方	107・117 118
粟田右大殿	122・140
三人称表現	34～40・42～44・48～50・54～61・64～66 68～76・98～102・112～116・126～128等

右に見るところから、交際のあった男性によって部分的にもあれ一応まとめようとしたらしい形跡は窺える。家集の表面にその名を表わす主な人々は、左大将・中関白・粟田右大臣・公任・実方らである。そのうち恋愛の対象として大きく扱われているのは、いうまでもなく「左大将」との関係である。また脱落があるのかも知れぬが、前に受ける名が無くて「この君」の呼び方で始まっている一群があり、「前大納言公任卿集」にそれらの贈答がみられるところから「この君」が、公任卿であることがわかる五四から六一に至る歌群もある。ほかにこれと同じく三人称表現のいくつかのまとまりや、公任・実方・相如と続いてその名を出し一続きとなっている一〇五から一〇八に至る、宮廷での歌人グループとの交流をものがたる場面もあるが、中関白・粟田右大殿・実方らとの贈答は、個〻に於て一群をなしてはいない。更に中宮の仰せに応じて詠じた歌も一群のまとまりとはなっておらず、集中に散在している。こうした点から、部分的には人物によってまとめようとした意図がみられるとはいえ、なお必ずしも一貫した編纂上の意識としてあったとは言い切れないようである。たゞ当時にあっては、いまだ文芸としての確立がなされず、会話的伝達要素を主とした和歌の性格から、自ら人物を中心にその贈答歌を整理しようとする傾向が生まれたものであろう。従ってこうした方法は、私家集が編まれる一般的傾向—特に女性の私家集に多い回想形態の—とも言うべきもので、むしろ平凡な常識的な一つの編纂意識にすぎなか

ったことは言うまでもない。

ところで、三人称のみで記した小歌群のいくつかがある。こうした三人称表記は、後撰集や当時すでにさかんに試みられつつあった歌集の物語化などの影響下にあるものであろうが、それらの一つ一つの贈答がすべて個々別々　物を意味するものか、あるいは同一人物との関係であったとしても、状況・場面に応じて異った三者的表現を用いたものか、疑問を含むところではある。三人称を用いる編者の意識としては、おそらく人物名などにはおかまいなく、編纂時における編者自身の関心事は、むしろ内容や歌そのものに注がれていたのかも知れぬ。またあらわに名を出したくもなく、朧化法を用いたのかも知れぬ。尤も、交際の深かった「左大将」にしても実名ではない。また先程ふれた前大納言公任卿集・新古今集におさめられた五四・五五の贈答を含む五四から六一に至る一群が、三人称で記されていることなどにつけても、そこに何らかの編者の意図を見るような気もする。

更にこれと並んで注意されることに「けり」の表現がある。「けり」については、自撰家集に用いられるのは、自撰にふさわしくないから、傍注などの竄入であろう[注7]か、と見られる先学もあるが、これは「男」「女」などの第三者的表現と相俟って――客体化した自己の動作を現在に迎えとって、その迎えとった自己を他者に準じて客観視する「けり」、つまり『けりは過去から現在までの時間的経過とそこに行動する他者という二つの特性を兼備した語』[注8]と説明されているように――やはり編者の意識の中に働いた物語化的傾向・進んだものといえないまでも虚構性への志向のあったことを、そこに見出すことが出来るように思うのである。こうした点からも撰者馬内侍の脳裡には、特に思い出深い貴公子たちの名以外には、三人称表現で事足りたのであろうし、多少とも物語めかして筋の構成を試み記したところは三者表現を撰んで用いたものではなかったろうかと思うのである。

かつて高橋正治氏[注9]は、大和物語の構成を基礎とした試論を発表された。

一見雑纂と見られる大和物語の構成に於て、或る章段に出て来た人物に関して惹起した連想が、副次的段章となって次に展開され、連想の糸がたどられて本筋から離れてゆき、また或る時点で第一義的段章に属する本筋にもどるという一種の脱線がその構成の中に有る、と。そして、副次的段章が殆んど技巧歌である点や人物名のない「男」・「女」の表現になる段章は、内容中心で、人物に対する興味ではなく、内容や歌への関心に比重がかかっていることを解明された。

馬内侍集にあっては、物語化への志向性がみられるとはいうものの、さして進んだものでもなく、詞書も不親切で、概して難解な面が多く、明らかに読者を意識した大和物語とは自ら異なってはいるが、高橋氏の御研究に通う一面のあることは否めないように思う。

それではつぎに類聚傾向や連想作用による排列、脱線、ことばの遊び等について具体的に見てゆくことにしよう。

一六八から一七五に至る間に、次のような排列がある。（但し、詞書の一部あるいは歌詞の一部で示した。）

168 都にもなへてはいはし桜花
169 たきをおとせは色々の花うきたり
170 つゝしつはきの花さきたるところにて
171 やとかへてにほひをとるな梅の花
172 むめの花いくとせ春をへたてゝか
173 する人にほひなかけそ梅の花
174 ……花たちはなもかはかりやなる
175 思ひきや花たちはなのかはかりも

168—170は、鞍馬に詣でた時の歌三首である。171—173は、或る所に植えかえられた古い馴染みの梅の花に寄せる、三人の作。174 175は、昔の友との贈答である。

これらは、互いの詠作年次は不明であって、時期を同じくして詠じられたとする証しは無い。むしろそれぞれ異った年に詠作されたものを「花」の類聚意識によって集められたものと見るのが妥当であろう。また次の

108 郭公わするらむこそうの花の　（略）
　　みそきの日しのひてかたらふ人〻のもとより
109 うしろめた神もき、いれぬ　（略）

に於て、前者は、すけゆき（相如か）との贈答であり、後者とのつながりはない。おそらく四月の連想から葵祭の禊の日の歌が排列されたもので、季節による類聚ともいうべきであろう。こうした類聚には、他に

143 十月はかりおもへることよみてと
144 ……かりもりしつる秋にもあるかな
145 ……あしろになん日ころあるとて紅葉にひを、つ、みて
146 ……うつろひたる萩のの下葉にかきて

などの、詠歌動機を全く異にする互いに無関係な歌を、秋の季を合せて集めたところがあり、人事に関するものでは、127 128の共に或る男への拒否の歌に続いて129には詞書と歌との間に或いは脱落があるのではないかとの疑問のあるところではあるが、前二者との関係は無いにもかかわらず「思ひなかけそ岸の藤波」と、きっぱりとした拒否の態度を、さる男に示したものが、配されている。同時にまた前二者の「浪の下水・しらなみ」から後者「ふじなみ」への連想も働いての排列であろうか。

こうした傾向は、ほゞ時代を同じくして生きた歌人たちの、自撰と見られる家集で、しかも雑纂形態のもの、たとえば小馬命婦集や伊勢大輔集・小大君集・紫式部集・清少納言集等にも部分的にみられるものである。四季による類聚とか哀傷歌が年代排列の原則を破って集められているとか、歌合、絵合等の歌がまとめられるとかあるいは釈教歌が続いて年代におかまいなく排列されるとかの形をもって表れている。この段階における連想類聚意識は整理されていない家集中には往々にしてみられるものである。

つぎに連想による排列・遊び・脱線などについて見よう。

さい院よりうつえをたまへれは
77 なけきとそほと〳〵思ふおの、をとはいはひのつえをきるにそ有ける
　返　し
78 おのの、をともたつねさりせはは椿いはひのつえをいかてしらまし

人のもとにかれたるもみちの枝をやりたれは
79しもかれのあふくなけきの枝なれはふかき色とはみえす
そありける
左大将ちかことふみををこせたまてかはりのふみ
をこせよとせめたまひしかは
80ちはやふるかもの社の神もきけ君わすれすは我もわすれ
し
やすのふふみをこすれといひもはなたねはうりに
かきて
81うりふ山そのほととのみたのめつゝひさしくなるはつら
きわさかな
左大将兵衛佐にてをはせしときうつきに物をいひ
そめたまて
82ほとゝきすこゑをはきけと花のえにまたふみなれぬ物を
こそおもへ
かへしかしは木のわかき葉にさして
83ほとゝきすしのふるものをかしはきのもりても聲のきこ
えけるかな
あせちの大納言むかしは物なときこえたるをのち
はほかにて人かたらふとき、て
84さはにみなおりたちぬとも葉をわかみわかかりそめしよ
とのあやめは
五月のなか雨にあやめのおちたるを宮御覧してあ
はれ歌よめとおほせられしかは
85昌蒲草いつれのさはにねをとめて身をはなかめにくたし
はつらん

右の77―85に至る歌のうち、まず77―82に至る六首をみることにしよう。

77・78は、齋院選子から贈られた卯杖をめぐっての馬内侍と斎院の宰相との贈答歌であるが、他は詠歌時点及び動機はすべて無関係な歌である。これらの歌の間における連想の糸をたぐる事によって逆に編者の意識としての排列過程を探ってみよう。

先ず、77の「なげき」の詞は、「嘆き」の音から「投木」への連想を呼び、更に「枯れ枝」へと連想が及び79番の詞書「かれたるもみちの枝」・歌の「なけきの技」を介して、79番の歌がこの位置に置かれたものであろう。そしてまた、79の「なげきの枝」は78の「祝いの杖」との対照をなしていることも見逃せない。77の「嘆き」からの連想の糸をたどってみると、嘆き（投木）から79の「枯れたるもみぢの枝（離れたる・深き色と見えず）＝なげきの枝」へ、80の「誓言文」へと連想がたどられ、更に81の「文」、82の「ふみ（文・踏）なれぬ」へと連繋をもって発展していく。また80の「かはりの文おこせよ」・81「文おこすれど」・82「まだふみなれぬ」などと尻取り遊びのような言葉の連繋による遊びを感じさせるところにも注目させられる。細かいところでは、80の「せめる」、81の「いいはなたず」の表現も対照的な概念として意識的に言葉を選んでおいたものかも知れぬ。また左大将とやすのぶは、内侍との関係の親疎が対照をなしており、共に我が身に思いを寄せる男性の対照と状況のおもしろさを意識的にねらった排列ではないかと思う。

なお、81から82へのつながりは「つらきわざかな」と結ぶ81の

歌の「つらし」が、憂し・つらしの詞の連想にかけて「うき卯月」へとつながりをもっていくとも考えられる。このように、ここでは言葉の類似性・言葉のもつイメージからくる連想や意味の対照性が重っている。

また、77 78の「齋院」からの連想をうけて、80の「賀茂の社の神」が配されたものであろうことは容易に考え及ぶところであるが、これは、『紫式部集』における「かもにもうでたるにほと、きすなかなむと云々」の詞書をもつ十三番の歌「ほと、きすこゑまつほとはかたをかの」と、「やよひのついたちかはらにいてたるに」の詞書の十四番の歌「はらへとの神のかさりのみてくらに」の二首にあって、十三番の歌が賀茂参詣の折の作であるところから、賀茂の連想により年代排列の原則をおかしてこ、に配されたものであろう、との今井源衛先生[注10]による御考察と類似した排列であろう。

これと同種のものは、また、家集3・4にも見られる。すなわち

七月七日にはちすのたまをつくりてさりにし人のをこせたれは

3、思ひあまりたのめし中のくやしきはこの世とたにもちきらさりしよ

ともたちのもとよりあまになりなむとありしはいかにといひたれは

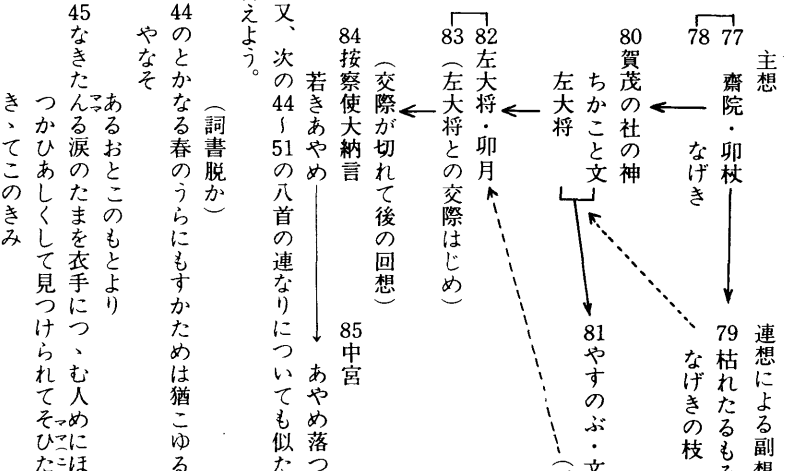
4、しかすかにかなしきものは世の中をうきたつほとの心成けり

とあって、3の「はちすのたま」からの連想で「尼になりなむ」を4に配したものであろう。詠作年次は共に不明であるが、想像をたくましくすれば、4は、あるいは堀川中宮媞子の崩御（天元二年六月三日）後、小馬命婦や他の女房たちが、多く尼になっていった天元二年七月頃の事とも推測できなくもない。もし、そうとすれば、馬内侍は未だ二八、九才、世をそむくには未練のあった心境を述べたものということにもなるだろう。因みに媞子の五七日は七月七日にあたり、七七日は七月二一日にあたるので、そうした連想によってこの歌が配されたとも見られないであろうか。

さて、こ、で85まで範囲を広げて考えてみよう。82 83は80と同じく左大将との関係を示すものである。更に84の「あぜち大納言」を朝光[注11]とみることができるならば、これも左大将との思い出を語る、いわば主想の一連ということになるだろう。按察使大納言を左大将の後の姿と見ることは、大胆な憶測に過ぎるかも知れないが、もしこうした憶測が許されるとするならば、左大将との馴れそめの思い出（83）と、交際が切れて後の回想（84）を並列したと見ることもできよう。

84と85との関係は、84の歌詞「…葉をわかみわかゝりそめしよとのあやめは」からの連想で、85の「五月のなか雨にあやめのおちたるを宮御覧して云々」がおかれたものであろう。『あやめ』の連想で「若きあやめ」と「あやめ落つ」が対照的に思い出された副想とみられる。

77から85に至る既述のことがらを整理し図示すると次のようになるだろう。



又、次の44～51の八首の連なりについても似たようなことが言えよう。

（詞書脱か）

44のとかなる春のうらにもすかためは猶こゆるきのいそかしやなそ

あるおとこのもとより

45なきたんる（ママ）涙のたまを衣手につゝむ人めにほとそへにけるつかひあしくして見つけられてそひたる（ママ）人さりぬときゝてこのきみ

46人しれすぬれわたる身はなみた川いはれの池をあはれとそおもふ

返し

47おもほえす涙の川にぬれきぬを我よりほかにたれかきるへき

たつた山に二日はかりありてたつた山もいかかとて[注12]

48ふく風にけになひかすはをみなへししのひにかゝる露をしらなん

とあれは

49さかのいろなるこゝろとやきく

といひしかは

をみなへしつゝむわかみは野へなれや

おなし君九月はかりに

50思ふ人やゝすきぬとやきくの花雨をきゝても露にぬるらん

ほかにとてかへしつなとかをとはのといひたりしかは身つからきたるにあはねは九月九日菊にさして

51菊のうへの露をはをきてなみたこそわたの衣の袖もかはかね

44は風俗歌「玉だれ」からの連想から成ると解される歌であるが、「玉だれ」の連想をうけて45の「涙の玉」へと連なり、46 47の「ぬれわたる身・ぬれ衣を着る我」[注14]、ぬれ衣[注13]の連想をうけて「無き名立つ立田山」・「露」へと発展していく。

次に48～53の間は秋（九月）の季を合せて集めたものであり、近似した言葉の意味からのつながりを追うことができる。すなわち、袖もかはかね→うき気（浮き木）→なきなたつ袖・草つゆけし、等のつながりである。46 47・48～51までは、「この君」「同じ君」と表現されている或る公達との関係を物語るもので

ある。前にもふれたが、名を記さず、三人称表現で話を繰りひろげるところでは、展開される内容のおもしろさや歌への興味が前面におし出されていることは確かである。たとえば左大将[注15]を対象としたところでは、特定個人としての左大将その人への関心がより強く示されているが、44の歌のように、洗練された貴公子の女に対するからかいとみられるものや、女郎花を中心とした48 49の贈答等、いかにも平安貴族らしいおもしろ味があり、歌そのものへの関心の方が深かったのではないかと思われる。内容は省略するが、話の内容そのものにおもしろ味を示しているものに35～40に至る贈答や54～61に至る贈答などがある。

その他、ことばの遊戯による二首（元来成立上無関係な）の連接には、

かたらひてとしころありつる人ゆうさりひとのむこになりぬとき、て筏のかたをつくりて書てやる

96おほ井河人めもらさぬけふやさはそまのいかたしくれをまつらん

正月に空のけしきなともよしよめと宮の仰られしかは

97浦ことにあまはみるらんはつ春のけぬるき風に浪やなこまむ

があり、ゆうさり→くれ（日の暮れから年の暮れへと意識内で発展）——→正月・はつ春、との連想の糸をたどって配されたものか。そのほか17～19に至る「涙の川・氷」「十月・しぐれ」「しはす・たもとのうるう月のわびしさ」など、月の推移や類似した詞等による連接・類聚とみられるものなどがある。

以上、歌題や内容による連想・類聚意識の働いているとみられるところを例示してみた。これらの例によっても、類聚規準が一元的でなく、決して統一的に何かによって一貫されているのでもなく、部分的連想につながり、小部分の個々の事実への関心が深められ、或は言葉のおもしろさや具体的表現の連関にまで及んで、多彩な類想を呼んでいることがわかるであろう。

次に、対照的なもの、排列に主軸をおいた例を示してみよう。相隣る二首の歌は贈答歌ではなく、元来相互に無関係な成立事情を有するものである。

(イ)84さわにみなおりたちぬとも葉をわかみわかかりそめしよとのあやめは　（若きあやめ）

85あやめ草いつれのさわに根をとめて身をはなかめにくたしはつらん　（五月のなかめにあやめおつ）

(ロ)90人のこむとてこさりしに

91こむという人来て

(ハ)93三笠の山にふみかよふとか

94ゆきかよふ跡たえぬるか

(ニ)135いみしくふるともかならすまいらん「さらなり」

136ありさまにしたかいてかれよりもまいらん　「やえふきのひまもあらしを」

(ホ)180たれをけふまつとかいはん

181またわすらるるならひ有けり

(ヘ)86かきの下葉にかきて　「つゆとけて」

87いもの葉につゆのとまれるを　「下葉におくつゆ」

こうした排列部分がその例である。(イ)は84の若きあやめから

の連想で、五月の長雨に落ちたあやめが配されたものであろう。(ロ)は事実によったもので、90の待っていたのに来なかった、に対しては91「こむという人」が来て一夜中うろついていたが逢ってやらなかったとの内容を持つところでの対照性である。(ハ)は、「ふみかよふ」に対して「ゆきかよう跡たえぬるか」と配したもので、通う・通うことがたえるの対照性、(ホ)(ヘ)は言葉の表面上の対照性をもって配したものであろう。(ニ)は「かならず」「ありさまにしたがいて」の言葉と共にその状況の対照もあって興を引き配されたものであろうか。こうした趣は、大体後半に多く表れているが意識的に排列したものであろう。

四

以上見て来たように、馬内侍集には非組織的な形態の中に、連想による興味の推移、詞の遊び、対照意識、類聚傾向、物語化への志向等のいりくんだものがみられる。

極めて一般的に言って、男子の家集には、部立のあるものは別としても、ほゞ一貫した何らかの秩序によって統一されようとしている傾向がある。又、そうした男性の家集に比して、概して自由な立場をとっていると見られる女性の家集に於ても、部分的にもせよ或一つの秩序が見出されるのが普通である。そうした中にあって、一貫した体系を求めようとせず、自由な連想を走らせては言葉の遊びをなし、様々な要素が混じり合って形態上からは全く雑多なものになってはいるが、その糸をたぐってみれば、今みてきたような多元性を擁して、それが意識的に展開された結果であるらしいことを略〻見ることができたと思う。

馬内侍は、かつて大齋院選子のもとにいて、数年にわたる歌の記録を「大齋院前の御集」の形態に編纂したといわれている。それは編年体によるものではなく、四季を中心とした編纂形態をとっている。静かな齋院の紫野の生活は、内裏の生活とは異なり、日次形式によるよりも、美しい四季による印象の方が深かった為ででもあろうか。とにかく四季による一貫した編纂意識によってまとめられている。これは、「前の御集」が公の記録であり、私的なものへの意識とは自ら異なっていたからでもあろう。

しかし、それに対して家集は全く私的なものである。まして、自分の歩んで来た恋愛遍歴を主としたものであるだけに、極めて自由な連想をもて遊んだものではなかったろうか。過去はすべて美しく、夢の様に思い出され、今は亡き若き日の恋人たちの上に心はせつ、老いの慰みに弄び書き綴ったものではなかったろうか。家集の末尾も「宇治院にすむ」隠棲生活のものではなく、宮廷生活中の詠で閉じられている。こうした点にも彼女のこだわらぬ性格がよみとれるのであるが、こうした形式のない編纂方法こそ、馬内侍集の性格であるのみならずや、飛躍した言い方をすれば馬内侍その人の生き方でもあり、文芸に対する考え方ででもあったといえるかもしれぬ。和漢の才を豊かに持った清少納言が、枕草子に於て極めて自由性を発揮したのにも似て、形を脱した自由な世界により美的なものを求めてやむことを知らなかった馬内侍であったのだろう。それ故に生活の面に於ても常道を逸脱した一面もあったようだが、幼き日から文芸的雰囲気の高い徽子女王、煌子中宮、選子内親王、或は詮

子、定子中宮の後宮に息づき、当代の一流歌人や洗練された権門貴紳に接して、自ら磨かれて行った教養――懸詞や縁語を駆使し、古歌をそらんじ、その場にふさわしい機知に富んだ応答が求められ、そこに価値が認められていた中古宮廷歌人のもつ風潮の中で育てられた、馬内侍の詠歌態度・意識・虚構性などが生んだ結果であろうと思うのである。すなわちこうした傾向は、彼女の文学精神にかかわるものであろう。それ故に人目に触れることや勅撰集のための編纂の目的にではなく、彼女自身の文芸的な遊びと相俟って、楽しみつゝ若き日の歌屑を、あくまでも自分を中心として女の立場から整理したもので、その時期は、静かな隠棲生活に入ってからのことと推察される。

注

1、底本は契沖筆本（三手文庫蔵）とし、勅撰集からの補入歌を除いた歌数である。

2、竹内美千代著「紫式部集評釈」二二二頁

3、安和から長徳に至る間の左大将、伊尹・頼忠・朝光・道隆・済時・道長のうち、年令的にもよく、「朝光集」にも二人の交際を証しする贈答のある点から、朝光とみる。鈴木一男氏・竹鼻績氏も朝光とみられる。

4、「馬内侍」――その生涯を中心に――（「国文学」昭和三四年三月号）

5、「人文論究」昭和三五年六月号

6、平安朝歌合大成

6、本位田重美氏『馬内侍集覚書』（「人文論究」昭和三五年六月号）

8、春日和男先生『助動詞「けり」の二面性』（「言語と文芸」三四号）

9、「別本大和物語の成立に就て―構成を基礎とした試論―（「国語と国文学」昭和二八年二月号）

10、「紫式部集の復元とその恋愛歌」（「文学」昭和四十年二月号）

11、84の按察使大納言が誰をさすか明確ではないが、詠歌年次推定表にも記したとおり該当する為光・朝光・済時のうち、より可能性の大きいのは、後者二人である。しかし、済時は永祿二年以来左大将で、世に言われる小一条大将として名が通っており、馬内侍との交渉を物語る形跡のない点が問題である。朝光は、後に枇杷大納言の北方との交渉で有名であるが、馬内侍との交際がすっかり絶え果ててしまった後の、左大将の姿として、交際時の左大将なる称号を用いず、按察使大納言としたのではないであろうか。たしかに「左大将」と「あぜち大納言」の呼び名を一人物に用いることは、常識的に見てうなずけぬかも知れない。しかし、粟田右大殿とも右大殿とも記されているのも道兼をさしているらしく受けとれる点もあり、「あぜち大納言」を朝光の後年の姿と見ることのできる可能性は、かなり大きいのではなかろうかと思う。

12、錯簡の疑いが持たれている箇所である。本位田氏によれば、20の歌と関係のあるところで、20・48の間にあるべきはずの20の返歌が落ちたものとみられている。なお、48の詞書が48の歌の詞書と見る上に多少問題のある点も御指摘がある。

13、注12に記したように錯簡とみて20番を補って考えても、「ぬれ衣」の連想から「露」へと続き問題はない。

14、柿本集（15267）「無名のみ立田の山の麓にはよにも嵐の風も吹かな

む」。古今和歌六帖（3733）無名のみ立田の山のさね蔓人に知られでくる由もがな」。拾遺集（699）なき名のみたつたの山の青つゞら又くるひとも見えぬところに」等の用い方による。

15、「左大将」も固有名詞でなく、三人称表現ではあるが、この家集では、特定個人朝光をさしていると思われ、「男」「女」とか「去りにし人」などの表現とは、意識の上で自ら異っていると見られるので、それらとは区別して考えた。

〈付記〉

本稿は、去る昭和四十四年九月二十一日西日本国語国文学会に於て発表した草稿に加筆したものである。

建禮門院右京大夫集校本及び総索引　井狩　正司
咸宜園蔵書目録　杉本　勲
古典対照語い表　宮島　達夫
福田良輔教援退宮記念論文集　同教援退宮記念事業会
乾いた空　小宮　隆弘
善本写真集30～33　天理図書館
近世文芸資料と考証Ⅵ　棚町　知弥
密田教授退宮記念論集　同事業会編
竹馬狂吟集　木村三四吾

▼受贈雑誌　昭和44年1月～12月

白路　24巻Ⅰ～4・6～12　八雲　29巻Ⅰ・4・7～11
上代文学研究会々報（東洋大学）19
文芸研究（東北大学）60・61・62
肇国32巻1・6～8
国文学論叢（竜谷大学）14
淑徳国文8・9
明治大学教養論集46・51・52
相模女子大学紀要31・32
城（城同人会）38
国文学―言語と文芸―（東京教育大学）61・65
文学論藻（東洋大学）40・41・42
成城文芸（成城大学）52・53・55
国語国文学（名古屋大学国語国文学会）23・24
国文学―解釈と教材の研究―（学燈社）14巻2～15
国語国文（京都大学）37巻12・38巻1～11
語文（日本大学）31
文芸研究（明治大学）20
文学部紀要（中京大学）3巻1
国語学（東京大学）75・76・77
国語と国文学（東京大学）46巻1～8
人文研究（神奈川大学）40・41・42
人文学研究所報（神奈川大学）4
国語国文学研究（熊本大学）4
萬葉（関西大学）70・71
能楽思潮50・51・52・53
演劇研究（早稲田大学）3
学苑（昭和女子大学）349～360